

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(8)

講題：台湾と日本の長期介護サービスの発展

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 8 回は、台湾健康宅配科技有限公司の王照允執行長による「台湾と日本の長期介護サービスの発展」である。王執行長は医薬業界の長期介護サービスという観点から、高齢化社会となった台日の長期介護産業の現状、挑戦と未来の発展について、学生たちにわかりやすく教えてくれた。台湾の長期介護産業はまだ未成熟であるが、長期介護サービスの先進国である日本の経験に学び、高齢者が必要とする介護を提供し、平板化した長期介護産業を開放して民間企業に参入させ、いっそう競争力を具えれば、もっと多くのイノベーションと就業機会を提供できるという。

「超高齢化社会」に突入した台湾の現状と影響

最初に王執行長はこう述べる。65 歳以上の人口を基準に、 $\geq 7\%$ は高齢化社会、 $\geq 14\%$ は高齢社会、 $\geq 20\%$ は超高齢社会に達したと見なされる。台湾は 2017 年に高齢社会に、2025 年には超高齢社会に突入すると予想されている。アジア諸国の高齢化の特徴は高齢化少子化のスピードが速いことである。戦後のベビーブームにより、台湾は高齢化から超高齢化するのにわずか 32 年で、2 年前からは労働人口がすでにマイナス成長を見せ始めた。こうした人口構成下で高齢者介護の負担はさらに大きくなり、同時に退職の延長による負担増、税金の上昇といった課題が出ている。また高齢者の医療需要時間は長くなり、医療費、介護費、人手不足等の問題もある。しかし、執行長の認識では、急速な高齢化は政策、経済、社会問題等でチャレンジする、多くのチャンスをはらんでいる。

日本に見習う：長期介護産業の発展と需要

人口構成の変化にともない、高齢者が求めるサービスは関連産業を発展させた。そこには食住、レジャー、財テク、介護等が含まれる。医者や薬剤師のような欠くことのできない需要以外に、台湾では多くの高齢者が必要とする産業の創造が待たれている。日本では 2000 年に介護保険制度が始まり、ほとんどの関連企業は 2003 年に設立された。王執行長は「和民グループ」が 1990 年代後半に老人向け宅配サービス、養護施設の設立、宅配料理などのサービスを開始したことに言及した。「トヨタ」は車椅子で乗車、昇降できる車両を設計し、また高齢者ドライバーによる事故をなくす車両を開発した。もともと医療教育企業である「ニチイ」は、近年は長期介護人材の育成にも力を入れ、介護センターを設立して、産

業が縦横に機能するようにしている。王執行長は養護センターの設立を例に台日の違いを示した。台湾では病院系列の養護センターが多いのに対し、日本は企業主導で、自宅感覚、社交活動を重視し、個別サービスを提供する。また日本の経験に学び、長期介護サービスに最も重要なのは実際に寄り添うことだと強調して述べる。高齢者の希望と心身の要求を尊重することこそ最も大切である。

長期介護産業発展へのチャレンジとチャンス：政策、観念、イノベーション

長期介護産業が発展するには家庭介護に対する考え、政府の政策、産業イノベーションの発展の三面に注意することが不可欠だと執行長は指摘する。現在台湾の長期介護が発展する上で直面する問題として家庭介護に関する情報の多寡、産業変動の早やさ、それに加えて長期介護保険を安定した財源の上に設置することがあるが、台湾にはいまだに整備された長期介護保険はない。政府主導下で行う長期介護サービスでは国民の最も基本的な生理と安全の要求を満たせるだけである。多くの自由市場を開放して企業に参入しやすくすれば、市場に高度なサービスが現われ、基本サービスはそれに伴って発展する。執行長の分析では、長期介護産業の経済規模は医療費の6分の一で、周辺産業は5倍の収益を得る。台湾の長期介護産業の規模は6千億に上る市場だという。しかし、もし台湾の現在の長期介護産業が平板化した状態であれば、介護要員の社会的地位は低く、給料も低いままであり、高度な人材を呼び込んで長期介護市場に参入することはできない。もっと多くの企業が長期介護産業に投資して、すぐれた成績をあげれば、品質は競って向上し、吸収した優秀な人材を産業に投入できると執行長は指摘する。それから近年日本が少子化と高齢化の需要を結び付けたように、養護センターに幼稚園を設立することも将来に可能性を生み出すモデルである。学生たちには不断の学習、創造、変化への観念を以て超高齢社会に向けてよく準備するように励ました。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 黄馨儀・日文系副教授)

(日本語訳: 塚本善也・日文系副教授)